光文社時代小説文

伊達政宗(三)

長編歴史小説 山岡荘八

光文社文庫

長編歴史小説
伊達政宗(三)
著者　山岡荘八

昭和61年3月20日　初版1刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　凸版印刷
製本　凸版印刷

発行所　株式会社　光文社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Sōhachi Yamaoka 1986
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70322-4　Printed in Japan

光文社文庫

長編歴史小説

伊達政宗(三)

山岡荘八

伊達政宗 (三) 目次

鯛の見る夢 9
独眼関ケ原 51
売物関ケ原 92
清酒濁酒 133
黄金吹雪 174
開拓精神 214
大蛇の小函 255
羅馬は招く 296

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

伊達氏家系略図

- 稙宗
  - 晴宗
    - 親隆（岩城家を継ぐ）
    - 輝宗
      - 政景（留守家を継ぐ）
      - 昭光（石川家を継ぐ）
      - 盛重（国分家を継ぐ）
      - 直宗
      - 義姫（最上氏）
      - 政宗（梵天丸）＝愛姫（田村氏）
        - 正室系
          - 五郎八姫（家康六男松平忠輝室）
          - 忠宗
            - 綱宗
              - 綱村
                - 吉村
            - 宗良（田村家を興す）
          - 綱
          - 竹松丸
        - 側室系
          - 秀宗（母飯坂氏・宇和島藩祖）
            - 宗利
              - 宗贇（むねよし）
          - 宗清（母飯坂氏・飯坂家を継ぐ）
          - 宗信（母多田氏）
          - 宗泰（母塙団右衛門氏）
          - 宗高（母柴田氏）
          - 牟宇（むう）姫（母柴田氏）
          - 宗実（母芝田氏・伊達成実の跡を継ぐ）
          - 宗勝（母只野氏）
          - 姫（母只野氏・亘理宗実室）
          - 千菊姫（母村上氏）
      - 小次郎（竺丸）
    - 義宣（大崎家を継ぐ）
    - 実元
      - 成実（藤五郎）
    - 宗澄
    - 某（四郎・家臣の桑折家を継ぐ）
    - 晴胤（葛西家を継ぐ）
    - 宗清
    - 宗殖（家臣の村田家を継ぐ）
    - 綱宗（家臣の亘理家を継ぐ）
    - 元宗（綱宗死後跡を継ぐ）
    - 康甫（東昌寺住）

田村氏家系略図

盛顕―義顕―隆顕―清顕―宗顕（清顕の弟）

女（愛姫・伊達政宗室）

最上氏家系略図

義淳―義定―義守―義光―義康

義光―家親―義俊

義光―義忠（山辺）

義守―義直（楯岡）

義守―女（義姫・伊達輝宗室・政宗母）

伊達政宗　卷三

（全六巻）

鯛の見る夢

1

「そろそろ、お身が、見えられる頃と思うていた」
政宗は小姓の桜井八右衛門を呼んで、
「今日はな、宗薫どのは、わが家にとってまことに芽出度い縁談で見えられた。申付けおいた粗酒粗肴、早々にこれへ」
そして、運び出されたのは「粗酒粗肴――」どころか、膳から喰(は)み出すような大鯛に、砂金の袋まで添えた山海の珍味であった。
「あの、少将さまは、それがしが参りますこと、前もっておわかりでござりましたか？」
「さよう」
政宗はすまして答えた。
「宗薫どののお出かけを堺で見張らせておきましての。その足で泉州から鮮鯛を購(あがな)わせて戻らせました」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「これはこれは、何とも恐れ入ってござりまする。すると、私めの口上は、申し上げずともおわかりというわけで」
「如何にも。五大老衆の申合わせの中に、諸侯縁組の儀はお上の許可を得て取運ぶよう、申合わせの一条があったそうじゃ」
「ほう、すると、一々、殿下の許可を得よと？」
「そうじゃ。しかし、その殿下はお亡くなりなされて、政治は内府がお執りなさる。そうなれば内府が即ちお上。いや、本日はご苦労でござった！」
宗薫は又しても小鬢を掻いて恐縮した。
「成程、そうでございましたか」
「いや、それよりもの、問題は火を噴き出したぞ。いや、石田治部少どのが尻ッ尾を出したと言ってもよい。さ、まあ、ゆるりと過されよ」
手ずから酒を注いでゆきながら政宗は可笑しさに耐えぬもののように、ニタニタと笑い出した。
「おぬし、どうやらまだ、お身の大事な役割に気付いて居らぬようだの、宗薫どの」
「何と言わっしゃります!?　わが身の役目……と言われまするとと、本日は、内府さまよりご当家へ、ご息女五郎八姫を、六男辰千代、改め忠輝さまに頂戴のために参上……それが役目かと心得まするが」
「ハハハ……それも役目じゃ。それも確かに役目の一つじゃが、それ以上の大役、政宗、改め

てご苦労に存ずる」
「はて？　それ以上の大役とは……？」
政宗はいきなり自分の膳の上から、見事に焼きあげた明石の大鯛をつかみあげて、目の下肉のあたりにガブリと白い歯を立てて一口喰った。
「鯛は海魚の王でござる。ハハハ……それにいよいよ歯を立てる。お身もこれで、利休居士以上の大人物におなりなされた。まことにお芽出度うござる」
宗薫は思わずコトリと盃をおいた。不思議な眼をして政宗を見返した。わかったようでもあり、わからぬようでもあって、うっかり口は開けない……。
むろん彼も尋常の者ではない。家康が、
「――まだ早い！」
と、両家の縁談をのばさせて来ていた意味は、彼なりに腑に落ちていたつもりであった。
秀吉の病気と外征が重なりあって、どっちがどうなるかわからぬ時に、縁談では少しばかり呑気すぎる。それに石田三成が淀の方と共に、神経を尖らせている時だけに、
「――その縁組まかり成らぬ！」
まだ生きている秀吉の命令という形で、不承知を宣告されては何うにもならぬ。
ところが、その秀吉は亡くなって、外征のことも漸く目鼻がついて来た。
「――太閤殿下は戦いに飽いた……」
という言い方はまことに無責任な、いい加減なものであったが、飽くにも飽かぬにも、平常

の意識が失われてしまっては全軍の指揮はとれない。
本人はどこまでも不世出の英雄らしく、戦場に屍をさらして果てるつもりであったが、運命はそれを許さず、結局、戦意はなくしたが、船はまだ残っていた、という武将から先に帰国することになってしまった。
この結果は、堺衆の眼から見ても、まことに歯痒い、だらしないことに見えた。
秀吉に退く気は少しもない。醍醐の花見の二日前、最後に発した命令では、
「――蔚山、順天、梁山の諸城を退去するなど思いも寄らず。断じて退去は許さざるゆえ、厳重に守備すべし！」
とあったのだが、その命令に歯を喰いしばって忠実に従った者は見殺しにし、初めから消極的な人々だけが無け無しの船をかり集めて先に帰ってしまうことになった。しかも、これ等の人々は、改めて迎えの船を出そうとしない。
出しても沈められるとわかっていたし、秀吉の膝下にあって参謀長の地位にありながら、石田三成が船の手配をしようとしない。
船が無いのだから弾薬食糧の輸送もむろん絶たれている。二階へあげられて下駄を奪われたなどと言うものではない。
秀吉が亡くなる頃には、残った諸将は、完全に戦場の捨て児であった。
今、誰々が残っているかと指を繰ってみると、一番勇ましく戦った島津義弘、同忠恒、加藤清正、黒田長政、浅野幸長、立花宗茂、有馬晴信、松浦鎮信等が、みな戦場に取り残されてい

る。

この戦を拡大させた張本人の宗義智や小西行長が最後まで残って戦っているのは当然のこととして、これ等の人々を何うして無事に帰国さすかは一番大きな問題だった。

秀吉の死を敵に察知されてしまっては、海上封鎖をいよいよ厳しくされるだけで全滅させられる恐れがある。

「――このあたりが五大老の腕の見せどころよ」

「――そうだ。もはや、諸侯も五奉行もお手あげだからの」

この相談は、専ら徳川家康と前田利家の間でなされた。

そして撤兵を決定したのが八月二十五日。

八月二十九日には、その命令を、在韓の諸将に伝えるため、浅野長政、石田三成、毛利秀元の三人が博多に急行することに決った。博多から更に徳永寿昌と宮本豊盛が、九月中旬、現地に向けて出発した。

何れにしても船が無い。諸侯も使い果しているし、急造しようとしても間に合わない。日本中で、天下はこの後どうなるのかと案じているので、誰も落着いておき去られた人々の運命まで考えてやる余裕がないのだ。

そうした中で最も冷静に骨を折ったのは、やはり家康だったと、宗薫は思っている。取り残された各将の留守居の者を督励しながら、自分でも、持船の殆どを吐き出した。更に博多、堺、小田原などの商人たちの持船も狩り集めて、

「――とにかく正月は故国でさせる目安がついたぞ」
三百余艘の工面が出来たと、ホッとした表情で聞かせ、そのあとで、今日の縁談を言い出したのだ。
「――伊達の少将も待っているだろう。その方一つ、縁組の口火を切って来てくれぬか」
そう言われて来てみると、政宗は又しても宗薫の思案以上のことを言い出した。
「いったい縁談とは別の大役……とは、何のことでござりまする？」
忌々しくはあったが、宗薫はそう訊ね返さずにはいられなかった。

2

政宗はまだニヤニヤ笑いを納めない。
「八右衛門、例の盃を」
小姓頭に言いつけて、大きな桐箱から取出させたのは、五合入りの眼のさめるような黄金の大盃であった。
「先ずこれにて一献。これは、わが家九代目の大膳大夫政宗以来の家宝でござる。この家宝にて十七代目の政宗、謹んで宗薫どのに」
宗薫は眼を丸くして盃面をのぞき込んだ。燦爛たる盃の中いっぱいに自分の顔が大きく映っている。
「少将さま！」

宗薫は震えだした。
「宗薫に、このような伊達家の重宝で、御酒を頂く値打ちがござろうか？」
「何の！　このようなものでは足りぬ。何しろお身は、天下を定めたのでござるからの」
「なに、天下を？」
危く盃を取落しそうになる宗薫に、政宗は又手ずから酌をした。
「さよう。この政宗は、些かがっかり致してござるが、これも時勢で止むを得まい。お身は、太閤殿下亡きあとの天下を定められた万民の大恩人じゃ」
「は……？」
「まだ、おわかりではござらぬかの？」
「は……はい。少将のお言葉、何時もながら大きすぎまして、凡愚のわれ等には見当もつきませぬ」
「ハハハ……能ある鷹は爪を隠す。政宗、おだてに乗って説明致すか」
「何とぞ是非……それで無いと、この御盃が」
「実はの、われ等も、ここで風船が欲しかった！　天下という風船がの」
「ごもっともで」
「ところが、どう考えても、このままわれ等の手には落ちぬ。ものには順序がござっての」
「な、成程」
「ここでは風船を、なるべくわれ等に近いところまで呼び寄せて、ジーッと風向きを見ている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com